

高山の文化を高めた人々 〈9〉

飛驒短歌会を創始した 大埜間霽江 はるえ

老田清子

敗戦後の混乱と荒廃のなかで、文芸を復興して世の中に潤いを与えようといち早く「飛驒短歌会」を結成した大埜間霽江は、明治二



十二年、丹生川村法力の漢方医大埜間家、父岩之助の長男として生まれた。

母の薫陶もあって少年の頃から

和歌の調べには馴染んでいたが、斐太中学から東京慈恵会医学専門学校へ進んだのを機に、金子薫園に師事し、昭和十年、三十六歳の時に第一歌集『一つの世界』を出している。薫園は「…入門すべく雪の日に訪ねてきた医学生の君は見るからに堅実な美丈夫であった。同君の歌から受ける総括した感じは白樺のごとく寒い弧（ひと）つのかさといふものを有つてゐることである…」と書いている。

昭和四年より東京麻布で開業していたが二十年五月の空襲で全焼したことが高山へ戻るきっかけとなった。馬場町で父祖よりの「大

埜間醫舎」を継ぎ、早速同志に図って二十一年一月五日、第一回の歌会を国分寺にて催した。

出席者十一名。飛驒短歌会の旗揚げであった。ガリ版刷り隔月発行からの出発だったが、十四号より活版印刷となり、結社誌としての姿も整い、会員も急速に増加して霽江は医業と短歌に明け暮れる多忙な日々であった。二十四年には初代の高山市文化協会長に就任し、公安委員も委嘱され、公人としても気力が充実していた。

五十二年に第二歌集『白樺』を刊行。千七百首を収める大冊である。続いて全飛短歌大会を主催し飛驒短歌合同歌集（出詠者八十四名）を出版した。さらに城山公園に福田夕咲、平湯峠に若山牧水の歌碑を建立した。



霽江は酒は好きであったが外に興味とて無く暇をみては発送用の封筒を広告のちらしで手作りするなど、ひたすら飛驒短歌会を愛し生き甲斐としていた。

この間の発行経費はかなり大埜間家の財布から出ていたらしい。「もうひとつ別の道楽をしていると思つて…」と周囲がよく聞いた言葉であった。

晩年、軽い脳梗塞を起こしてから涙脆く気弱になりつつも思いはいつも飛驒短歌の上にあった、昭和五十八年六月二十九日に八十三歳で急逝した。追悼号となった二百十五号には早船ちよ氏ほか各界

より多数が哀悼の辞を寄せている。翌年夫人の手により遺歌集『高原の雲』が出版された。

のぼりつめ見かへる坂の新雪に
みだれて寂し吾のあしあと
天辺にとりのこされし柿ひとつ

みかへる人のなくてうれをり
生前好んで揮毫したこの二首の前の歌は大埜間家の庭に、後の歌は有志の手によって丹生川村正宗寺の境内に歌碑となっている。